令和五年度　《第一回　適性検査型入試》

検査Ⅰ

時間　四十五分

受検上の注意

1. 解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2. 声を出して読んではいけません。
3. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
   方法を誤ると得点になりません。
4. 検査終了後、解答用紙を回収します。

郁文館中学校

〈このページに問題はありません〉

以下の資料1・資料2を読み、あとの問いに答えなさい。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

資料1

子供の頃、大人が「個性」という言葉を安易に使うのが大嫌いだった。

確か中学生くらいのころ、急に学校の先生が一斉に「個性」という言葉を使い始めたという記憶がある。今まで私たちを扱いやすいように、平均化しようとしていた人たちが、急になぜ？　という気持ちと、その言葉を使っているときの、気持ちのよさそうな様子がとても薄気味悪かった。全校集会では「個性を大事にしよう」と若い男の先生が大きな声で演説した。「ちょうどいい、大人が喜ぶくらいの」個性的な絵や作文が褒められたり、評価されたりするようになった。「さあ、怖がらないで、みんなももっと個性を出しなさい！」と言わんばかりだった。そして、本当に異質なもの、異常性を感じさせるものは、今まで通り静かに排除されていた。

当時の私は、「個性」とは、「大人たちにとって気持ちがいい、想像がつく範囲の、ちょうどいい、素敵な特徴を見せてください！」という意味の言葉なのだな、と思った。私は（多くの思春期の子供がそうであるように）容易くその言葉を使い、一方で本当の異物はあっさりと排除する大人に対して、「大人の会議で決まった変な思いつきは迷惑だなあ。また大人たちが厄介なことを言い出したなあと思っていた。平凡さを求められたほうが、それを演じれば良いのだから、私にとってはずっとましだったのだ。「（大人が喜ぶ、きちんと上手に『人間』ができる人のプラスアルファとしての、ちょうどいい）個性」という言葉の何だか恐ろしい、薄気味の悪い印象は、大人になった今も残っている。

大人になってしばらくして、「多様性」ということばがあちこちから、少しずつ、聞こえてくるようになった。

最初にその言葉を聞いたとき、感じたのは、心地よさと理想的な光景だった。例えば、オフィスで、様々な人種の人や、ハンデがある人、病気を抱えている人などが、お互いのことを理解し合って一緒に働いている光景。または、仲間同士の集まりで、それぞれいろいろな意味での ＊1 マジョリティー、＊2 マイノリティーの人たちが、互いの考え方を理解し合って、そこにいるすべての人の価値観がすべてナチュラルに受け入れられている空間。発想が貧困な私が思い浮かべるのは、それくらいだった。

それが叶えば良いという気持ちはずっとある。けれど、私は、「多様性」という言葉をまだ口にしたことがほとんどない。たぶん、その言葉を使って、気持ちよくなるのが怖いのだと思う。私はとても愚かなので、そういう、何となく良さそうで気持ちがいいものに、すぐに呑み込まれてしまう。だから、「自分にとって気持ちがいい多様性」が怖い。「自分にとって気持ちが悪い多様性」がなんなのか、ちゃんと自分の中で克明に言語化されて辿り着くまで、その言葉を使って快楽に浸るのが怖い。そして、自分にとって都合が悪く、㋐絶望的に気持ちが悪い「多様性」のこともきちんと考えられるようになるまで、その言葉を使う権利は自分にはない、とどこかで思っている。

こんなふうに慎重になるのは、私自身が「気持ちのいい多様性」というものに関連して、一つ、罪を背負っているからだ。

【中略】

誤解なく伝えられるよう願っているが、あるときから、メディアの中で、私に「クレージーさやか」というあだ名がつくようになった。それは、最初は友人のラジオの中で、愛情あるお喋りの延長線上で出てきた言葉だった。だから、最初、私はうれしかった。

けれど、だんだんとそれが、単なる私の *3 キャッチフレーズとして独り歩きするようになった。ある日、テレビに出たとき、そのフレーズをキャッチコピーのように使うことを、私はいいことだと思って *4 許諾してしまった。多様性があって、いろいろな人が受容されるのは、とても素敵なことなのではないかと思ったのだ。

そのとき、私という人間は、人間ではなくキャラクターになった。瓶に入れられ、わかりやすいラベルが貼られた。テレビに出ると、そのフレーズがテロップになり流れるようになった。私は馬鹿なので、最初はそのことが誰かを傷つけていることに気がつかなかった。

「村田さんがお友達に『クレージー』と言われているのは、村田さんが愛されてるのを感じて、私までうれしいのですが、テレビやインターネットでそう呼ばれているのを見ると、とてもつらく、苦しい気持ちになります」

文面や詳細は違うが、私の元に、何通か、このような手紙が届いた。理由は様々で、「村田さんと自分は似ていると感じるからかもしれませんが、自分が言われているような気持ちになります」という方もいれば、「村田さんのことを知らない人に村田さんが笑われているのを見るのが、残酷な構造を見ているよ

うでつらいです」という方もいた。「村田さんはどう思っていらっしゃいますか？」という、心のこもった、丁寧な質問に、私はまだ返事を書くことができていない。

笑われて、キャラクター化されて、ラベリングされること。奇妙な人を奇妙なまま愛し、多様性を認めること。この二つは、ものすごく相反することのはずなのに、馬鹿な私には区別がつかないときがあった。

「村田さん、今はずいぶん普通だけれど、テレビに出たらちゃんとクレージーにできますか？」

深夜の番組の打ち合わせでプロデューサーさんにそう言われたとき、あ、やっぱり、これは安全な場所から異物をキャラクター化して安心するという形の、受容に見せかけたラベリングであり、排除なのだ、と気がついた。そして、自分がそれを多様性と勘違いをして広めたことにも。

私は、そのことをずっと恥じている。この罪を、自分は一生背負っていくことになるのだと思う。私は子供の頃、「個性」という言葉の薄気味悪さに傷ついていた。それなのに、「多様性」という言葉の気持ちよさに負けて、自分と同じ苦しみを抱える人を傷つけた。

私には「一生背負っていこう」と思う罪がいくつもあるが、これは、本当に重く、そしてどう償っていいのかわからない一つだ。

どうか、もっと私がついていけないくらい、私があまりの気持ち悪さに吐き気を催すくらい、世界の多様化が進んでいきますように。今、私はそう願っている。何度も嘔吐を繰り返し、考え続け、自分を裁き続けることができますように。「多様性」とは、私にとって、そんな祈りを含んだ言葉になっている。

（村田沙耶香『気持ちよさという罪』による）

【注】

1　マジョリティー：大多数・多数派。
2　マイノリティー：少数・少数派。
3　キャッチフレーズ：広告や宣伝で、感覚に訴えて、強い印象を与えるように工夫された短い文句。
4　許諾：相手の希望や願いを聞き入れて許すこと。

資料2

私は虫の絵本を描いている。と言っても虫を擬人化して物語を語らせているわけではない。虫がどう生きているか、ということを *1 淡々と描いているだけの絵本である。

虫の生き様を描くためには、虫そのものの形態や生態などの素性を知らなければならないし、虫だけを描いていてはその暮らしを伝えることができないので、周辺の環境や地域性、季節性、それらとの結びつきを調べ、かつ理解することが必要になる。したがって、そこそこの観察行為も学習もする。こうしてある程度客観的な視点で虫を描いた絵本なので、私の絵本は「科学絵本」のカテゴリーに分類されるだろう。

ハエやアリ、ゴキブリ……。出会いたくなくても、普段の生活の中で虫にはいくらでも出会ってしまう。よく言われるように、虫は地球上で最も繁栄している一群で、有無を言わさず私たちの超隣人である。現生人類が誕生して20万年。それ以前からこの世に存在しているのだから、虫の方がわれわれよりずっと先輩だ。人類は誕生以来、虫にまみれて暮らしてきたと言っていい。

【中略】

「自然環境」との距離がはなれゆく一方の人の世の中だからなのか、虫が好きなことは、ときには変わり者だとか *2 偏執的性質をもつ人であるとか、そんな印象を持たれることが多く、虫が嫌いという人の方が圧倒的に多いと肌で感じる。マスコミの伝え方が影響している部分もある。現代の人の生活では、野生生物と接触することが少なくなっているし、除菌を推奨する世の中では、虫は不潔の象徴のような存在でもあろう。

私は虫が嫌いな人に、虫を好きになってもらおうなどとは考えていない。虫と接触する機会のない人が、虫を嫌ったり排除しようとするのは自然なことだ。わからないから怖いのだし、私が「ナガゴマフカミキリ」と出会ったときのように、㋑正体不明の生物に危害を加えられないように自らの命を防衛するという意味でも、それは当然の反応といえる。逆にそうした感受性がないことの方が恐ろしい。

しかしその虫も、われわれに共通する「命」をもつものだ。好き嫌いはどちらでもいいとして、虫は命ではない、とは言えない。大人はそれをどのようにとらえ、どのように子どもに伝えたらよいのだろうか。

人工的な都市環境ではない「自然環境」は、はるか昔から私たちの生活資源だった。その自然環境は身近な草木や虫、ケモノたち、さらに目に見えない菌など多くの生き物が構成しており、私たちはずっと彼らと暮らしてきた。本来、私たちも自然環境の中で、バランスよく生命活動のやりとりをしていたはずだ。

人は、今の暮らしを維持するために、それ相応のことを考えて行動しているが、現代ではその考えの中に、「自然環境」を人も含まれたものとして意識することは難しい状況にある。この世界は、虫を含めた多様な生きものの働きによって生態系の[*3]均衡を維持しており、私たち人もその働きや恩恵を受けなければ生存できない。自然環境の中にある虫の暮らしを見ていると、彼らは完全に循環資源の一部になっていることに気が付く。

一方で私たちの排泄物や死体などは循環資源として還元されず、食糧も一方的に自然環境を改変することで得ていたり、ふと気付くと生態系から切り離された暮らしをしている。生態系と関係をもたずに「見ているだけの側」になりきっているこの状況では、人は生態系の一員とは言えそうもない。

地球で暮らしているのは人間だけではない。自然界で起こっているあらゆる命の出来事を、大人たちはしっかりとらえることができているだろうか。親は子どもの環境のひとつであり、子どもは親の意識の影響を大きく受けて育つ。実感としてつかみにくいことではあるが、「ただ見ている側」から一歩踏み込み、「私たちも含まれている生活の場としての自然環境」も意識しつつ今を考え、次世代のために働く必要があるように思う。

野生の生き物は多種多様で、そのすべてに、産まれて生きて死ぬ、というドラマがある。虫は嫌われ者だが、ちょこまかと動き回る姿は人の肉眼でとらえやすく、姿も多彩で、嫌でも身近で意識される存在である。そうした生命力あふれる姿に恐怖を覚える人もいるし、興味を惹かれる人もいる。

一方、その死体もよく目にしているはずだが、こちらに注意を払う人はあまりいない。虫がそこに死んでいるのだ。死んでいるということは、生きていたということである。どこかで産まれて、育ち、喰い、繁殖し、生き切って死んでそこにいる。すべての虫が成虫になれるわけではない。多くの虫が成虫になるまでに誰かに喰われたり事故にあったりして死んでいる。

人と人以外の生物を同じように見ることは「社会生物学論争」にあるように危険なことであるが、単純に「産まれて生きて死ぬ」という点で、虫と人とは同じである。虫が産まれ、生きて死ぬさまは[*4]無垢で潔く勇敢だ。虫の生きざまをしつこく見ていると、自然と自分に重ね、私はこんな風に生きられるのかと考える。そしていつも、自分がいかに半端で腰抜けで出来の悪い生きものなのかと思うに至る。

一瞬一瞬を全力で生きる虫の生きざま、振る舞い、姿は、何よりも美しく見えるのだ。生き切って命を閉じた死にざまさえ尊く美しい。私たちが目にする

虫は、奇跡の末にそこにある生命の姿である。生きていることは当たり前ではないと、虫は私に伝えているように思うのだ。

虫を描くことで「生きる」というとてもシンプルなことを伝えられるのではないか。その描き方を探る日々の中で、虫と出会えたことが幸運なことだったと改めて感じている。何より、人間の「外」にある虫などの「自然物」の存在や振る舞いは私の予想をいつも超えている。だから単純に、虫を眺めることが面白いと感じるのだ。

（舘野鴻「命は描けるか」による）

【注】

1　淡々と：あっさりしているさま。

2　偏執的：偏っていること、特に、一つのことにこだわって、他人の意見などを聞かないさま。

3　均衡：　力や重さがなどの釣り合いがとれていること。バランス。

4　無垢：　けがれがなく純真なこと。うぶなこと。また、そのさま。

〔問題1〕 ㋐絶望的に気持ちが悪い「多様性」、とありますが、そのような多様性にも意味のあることが、資料2から読み取れます。資料2の筆者が、そのように考えるのはどうしてですか。三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

〔問題2〕 ㋑正体不明の生物に危害が加えられないように自らの命を防衛する、とありますが、資料1において、どのようにすることが、これと同じような行為であると考えられますか。解答らんの「こと」につながるように、三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

〔問題3〕 資料1と資料2、それぞれの内容に関連付け、あなたは「多様性」についてどのように考え、行動に移していこうと思いますか。五百字以上六百字以内で答えなさい。ただし次の条件と、次のページの〔きまり〕にしたがうこと。

条件　次の三段落構成にすること。

①第一段落では、資料1と資料2、それぞれの内容にふれて、筆者の考えをまとめること。

②第二段落では、「①」をふまえ、あなたの考えを書くこと。

③第三段落では、「②」をふまえ、あなたのこれからの行動を具体的に書くこと。

〔きまり〕

○　題名は書きません。

○　最初の行から書き始めます。

○　各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○　行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○　読点（、）や句点（。）や括弧（「　」）もそれぞれ字数に数えます。ただし、や。」が、行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます（ますめの下に書いてもかまいません）。

○　句点（。）と括弧（「　」）が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合（。」）で、一字と数えます。

○　段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○　最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。

（以下余白）